

TA参加型日本語会話クラスにおけるMoodleを用いた授業連絡の実態調査

趙 恩英・長谷川 守寿

1. 目的

本稿の目的は、日本語会話クラスに参加している教師およびティーチングアシスタント（以後TAと略す）が、Moodle上で行った授業連絡の実態調査から、授業にMoodleを用いて連絡を行う際のメリットとデメリットを明らかにすることである。

日本語会話クラスで話す内容は、学習者の出身や経歴などのバックグラウンドに依存する部分が大きく、学習者の情報を授業に生かすことが必要となる。さらに会話クラスでは、日本語母語話者（または日本語が上手な学習者以外の人）が参加し、学習者と会話をすることが望ましく、このような状況では、学習者のレベルにあわせて会話することが求められ、学習者のさまざまな情報を会話相手となる人が共有することが、学習者の会話能力の向上とスムーズなクラス運営につながると考えられる。

授業連絡の形態には、メモの受け渡しやファイルへの記入、ファクシミリや電話、電子メールなどさまざまな方法があり、現在も使われている。TAが多数参加するクラスでは、メモの受け渡しでは記録の保持に問題があり、ファイルへの記入では、記入の手間とファイル管理に問題が発生することが予想される。ファクシミリや電話では、連絡する時間に制限があり、また機器の保有も要求される。このように考えると電子メールが有望な手段と考えられるが、TAの人数が多く、授業回数も多い場合、メールの管理は難しく、授業連絡という学習者の個人情報を含む連絡には、最適な方法とはいえない。そこで本調査では、電子掲示板などよりもアクセス制限が容易に行えるMoodleを利用した。

本稿では、学習者情報の共有の目的のために、ブラウザ上で使用できるサーバーソフトウェアMoodleを用いた授業連絡の実態から、その有用性と限界を示し、Moodleを用いた授業連絡の効率的な運用法を提案する。

2. 先行研究

Moodleは学習管理のためのサーバー上のサイト運用ソフトで、ユーザーはブラウザで利用できる。オープンソースであり、多少サーバーの知識があれば、パッケージ化されているためインストールなどが容易に行える。また、学習支援システム(LMS/CMS)といわれるとおり、多様な用途がある(井上・奥村・中田(2006))。

日本語教育において、授業報告にMoodleを用いた例として、脇田・越智(2006)の事例がある。脇田・越智(2006)では、チームティーチングによる授業において、FAX送信により行っていた授業報告を、Web上で行ったものである。手順としてはワープロ文書で作成したファイルをpdfファイルに変換してWebにアップロードし、さらに配付資料やテストなども共有できるような形にしている。しかし、これはMoodleの機能の中で、ファイルのアップロード機能しか使用しておらず、しかもアップロードを担当するのは管理者のみであり、管理者の負担が大きいことになる。

本稿では、後述するようにフォーラム(掲示板)の機能を利用し参加者が直接情報をアップロードできるようにした。

なお、英語教育などの語学教育や情報教育さらに専門教育への応用にもMoodleは使われている(熊井・境・西納・安浪(2006)他)が、それらの教育における授業報告に関する研究・報告は管見では見られなかった。

3. 対象となるデータ

3.1. 対象クラス・TAについて

本研究で対象としたクラスは、日本語レベル2というクラスで、初級後半から中級前半の学習者のためのクラスである。大学の正規言語科目ではないため、学習者は単位を取得することができない。そのため、このクラスを受講者には、研究生や留学生の家族などが多い。受講者の国籍もさまざまで、学習経験も経歴も異なる。

また、このクラスは首都大学東京人文科学研究科日本語教育学教室開講の大学院科目「日本語教育学実践」(なお、Moodle上では「日本語教育実践」)であり、大学院生がTAとして参加している(博士課程前期の学生は単位が取得できる)。大学院生には日本人学生もいるが、留学生も含まれている。

「日本語レベル2」として参加する日本語学習者も、「日本語教育学実践」として受講する大学院生も10人以内で、大学院生と学習者が1対1または1対2のペアができる。そのため、授業の方針としては、「日本語が上手な人」と「日本語が上手でない人」がペアとなり、「日本語が上手でない人」からの情報の引き出し、代筆、確認と調整、発表練習、全体への発表という形で授業を進め、ペアでの会話を全体への語りに変えていくようにした。また、TAにはなるべく今まで会話をしたことがない学習者とペアを組むように指示した。なお、今回分析の対象とする、2009年度のTAの日本語教育歴は、教育歴3年以上で現在も日本語を教えている人から、日本語教育の経験としてはプライベートレッスンのみという人までさまざまである。

3.2. データ

本稿で使用するデータは、以下の3種である。まず、2009年度前期の授業に関するデータで、「日本語教育学実践」に登録されている全ての参加者が行った全ての活動を、エクセルフォーマットでダウンロードした。授業期間にあわせ、4月16日から7月22日までのデータである。以下「2009年ログ」と呼ぶ。

さらに、2008年度前期、2009年度前期の「日本語教育学実践」を受講したTAによる学期末のレポートをデータとする。レポートには日本語教授歴、授業報告の経験、さらに従来の授業報告とMoodleでの授業報告について、各自の思うところを自由に記してもらった。以下、「2008年レポート」「2009年レポート」と呼ぶ。

さらに、ログには残らない、Moodleに入る前の操作や「2009年ログ」の分析の際の疑問点を解消するために、2009年度の受講者にのみインタビューを行った結果（以下「2009年インタビュー」と呼ぶ）もデータとする。

なお、ログとインタビューの対象となった2009年度の受講者5名のうち、3名が博士前期課程の1年生で、1名が博士後期課程の1年生であり、Moodleに関する知識も経験もない。残り1名が博士後期課程の3年生（調査当時）である筆者の趙であり、趙のみ「言語教育実践支援システム論」の講義を受講しMoodleに関して多少の知識を有している。

3.3. 授業報告に関する指示

筆者が所属する日本語教育学教室にはMoodleに特化したサーバーがあり、そのサーバー上でコースサイトを作成した。コースサイトは、トピックフォーマットを選択し、図1のように学習者1名に一つのトピックとした。

教師側がID、仮パスワードを発行し、それらを記した文書を配布した。TAには一度実際にパソコンを用いて、URLの入力、ID、仮パスワードの入力までを行ってもらい、授業のコースサイトに入れることを確認した（これに参加していなかった学生が1名おり、その学生にはフォローがなかった。今回の反省点である）。

TAには授業終了後に以下のように毎回、授業報告を書くように指示した。

1. どの学習者にでも対応できるように、授業前に授業報告を読んでおくこと
2. 授業の後に、学習者別のトピックに返信する形で、授業報告を記入すること。

複数のTAで一人の学習者と話をした場合には、それぞれが報告を書き、一人のTAが複数の学習者を担当した場合も、複数の学習者分書くように指示した。さらに、授業が木曜日であったため、一応の目安として週末までに授業報告を行うように、口頭で指示した。

以後、授業内での学習者の様子を報告することを「授業報告」、授業前に学習者に関する報告を読んでおくことを「授業準備」、二つをあわせて「授業連絡」と呼び、授業連絡を行ったものを「授業連絡者」と呼ぶこととする。

なお、TAとして参加する大学院生には、授業連絡に関するデータを研究に使用することに承諾してもらい、承諾書にサインをもらった。

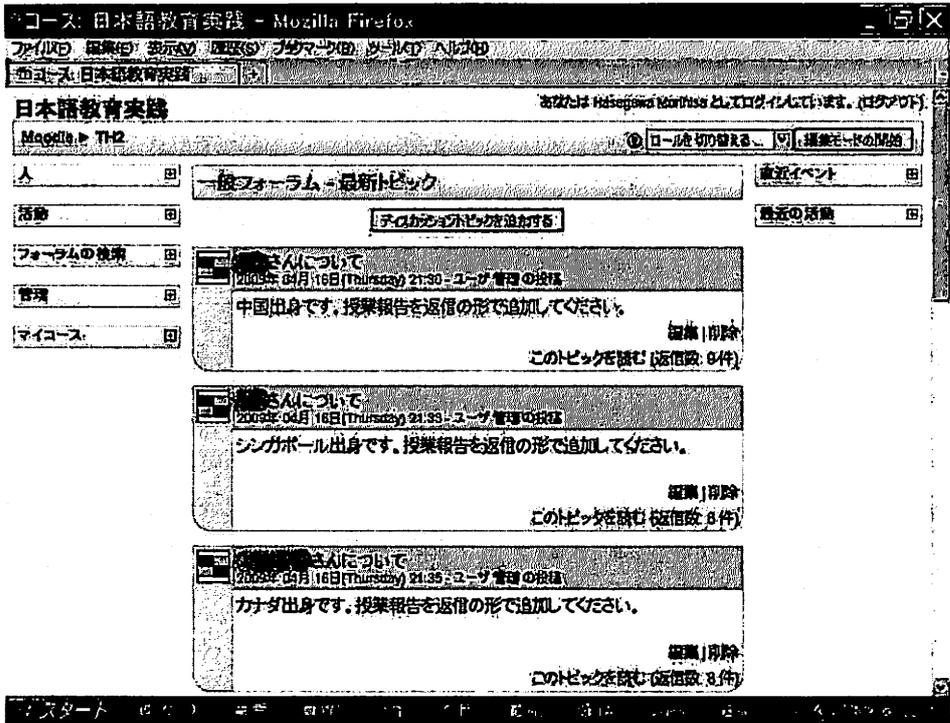


図1. 学習者別のトピックの実際

実際に書かれた授業報告は、図2（次頁）のような形である。授業報告を対象とした研究・報告が少ないため、比較の対象がないのであるが、筆者の一人である長谷川の印象としては、かなり詳細な授業報告であると思われる。

4. 方法

4.1. 観点

従来広く行われている紙ベースでの授業連絡を Web 上で行うことにより、Web の特性である「いつでも、どこからでも」アクセスできるというメリットが生ずると考えられる。本稿ではログを元に時間や場所に制限なくアクセスしているのか検証する。

Re: ●●●さんについて
 2009年06月14日(Sunday) 02:01 - ●●●●●の投稿

6月11日(木)●●●が担当しました。テーマ:もし自分が二人いたら…

まず、二人いたら…の意味から教えました。ひらがな、簡単な漢字、ごく一部の基本語彙は大丈夫ですが、初級文法はほとんど分かっていないようです。疑問詞の理解もちょっと怪しいです。

形容詞にはい形容詞とな形容詞があること、その肯定形と否定形を教えました。また、会話の流れから、Nのために、V(しよ形)のために、～の文型を教えました。スピーチの最後に「どうぞよろしく」と毎回言っていたので、スピーチでは「以上です」、自己紹介では「どうぞよろしく」と伝えました。

教えたことは理解が早く、その場ではどんどん吸収していきますが、恐らく復習の時間がなくて、定着していないのではないかと思います。今週はビデオを撮ったので、来週それを見ることで、復習できたらいいと思います。

投稿記事を表示する | 編集 | 分割 | 削除 | 返信

図 2. 授業報告の実例

また「使いやすさは重要な部分であり、実際に可能な限り、直感的に使用できるようにしています」(MoodleDocs <http://docs.moodle.org/ja/背景より>、2010年1月6日取得)とあるが、実際に直感的に使用できているのか、ログから確認する。

さらに、実際使用してどのような感想を持ったか、何か問題は起きなかったか、レポートとインタビューから検証する。

4.2. 分析対象

上記のような観点から、ログ、レポート、インタビューを分析する。

まず、「2009年ログ」には、時間・IPアドレス・名称(ユーザ名)・操作・情報(どんな操作を行ったか)が含まれている。表1は「2009年ログ」の一部である。例えば、このログから、Bさんは、2009年5月14日5時12分に、125.28.237.96のIPアドレスを割り振られたPCから、「日本語教育実践」のコースに入り(course view)、13分に●●●さんのトピックを見て(view discussion)、44分に●●●さんに関する授業報告を追加している(add post)ことがわかる(なお、「時間」は世界標準時であるため、9時間を追加して分析する。またMoodleで表示される「時間」は、分単位である)。

以下では、全体の報告・確認回数を確認し(5.1)、「名称」を中心に分析することで、授業連絡者別の操作の実態を明らかにし(5.2)、「時間」を中心に分析することで、いつ操作が行われたかを明らかにする(5.3)。そして「IPアドレス」を分析することで、どこから操作が行われたかを分析し(5.4)、さらにどのように操作したかを「操作」から分析する(5.5)。また、実際に操作した感想からMoodleを使用するメリット・デメリットを分析し(5.6)、以上の分析を進める際に生じた疑問やログに現れない「操作」の前の行動などをインタビューから明らかにする(5.7)。

表 1. 分析対象のログ (一部改)

時間	IP アドレス	名称	操作	情報
2009/05/14 5:12	125.28.237.96	B	course view	日本語教育実践
2009/05/14 5:13	125.28.237.96	B	forum view discussion	●●●さんについて
2009/05/14 5:44	125.28.237.96	B	forum add post	Re: ●●●さんについて

5. 結果

5.1. 全体の傾向

授業連絡者は教師 1 名 TA5 名の計 6 名で、全 12 週で延べ 64 名である。日本語授業に参加した学習者は延べ 62 名で、平均約 5 名、最大 9 名、最小 1 名であった。

表 2. 確認・報告と学習者・授業連絡者数の推移 (単位: 人)

第X週	確認	報告	学習者	授業連絡者
1	-	1	3	6
2	0	5	6	5
3	6	7	7	6
4	5	8	9	6
5	5	6	7	6
6	3	6	6	6
7	3	4	3	4
8	4	4	5	5
9	3	6	6	6
10	2	4	5	5
11	3	4	4	4
12	1	0	1	5
合計	35	55	62	64

(数は延べ数。一人が複数回書き込みを行うこともあったので、延べでカウントした。確認は授業が開始された第 2 週より行った。7・10・11・12 週は、対応する学習者がいなかったため、授業連絡者に教師を含めていない)

表 2 より、全体的な傾向として授業回数が進むにつれて「確認」の回数が減少していることがわかる。これに対して、「報告」の回数は授業回数よりも学習者数に関係している様子がうかがえる。

また授業連絡者は延べ64名であったが、授業報告は延べ55回にとどまった(1人のTAが2人の学習者を担当した授業もあったため、全てが漏れなく記入された場合64回以上になる)。これにはいくつかの原因が考えられる。まず、最終回は学習者が1名しか出席しておらず、通常の会話クラスとは進め方を変え、全員で話をする形式を取った。全員が状況を知っていると判断したのか、授業報告に関する書き込みはなかった。また、授業には参加したが報告を行っていないというケースが、学期の後半に見られた。授業に慣れたことが逆に報告を忘れるような結果となったのだろう。

次に、授業準備についてみる。授業報告に比べ、授業準備の回数は、35回とかなり少ない。これにもいくつかの原因が予想されるが、授業準備は授業の後半になるに従って、回数が減っていることから、出席する学習者も固定し、どのような特徴を持っているのか覚えてくることによって、確認する必要性が少なくなったためと思われる。これらの傾向に対するさらなる言及は、次項以降に個別のログ分析で行う。

5.2. 授業連絡者別の操作について

ここでは、会話授業に参加した授業連絡者各自の授業連絡の実態を、操作の回数と時間から分析する。

ログ分析の際には、学習者の情報の追加「forum add post」があるかを基準とし、学習者情報だけを見たものを「授業準備」、学習者の情報を書き込んだものを「授業報告」として分類した。下記の表3は、各操作の回数をまとめたものである。表の見方であるが、例えばAさんの場合、11回の授業報告をし、②全部で49分の操作時間をかけ、③1回の平均操作時間が4.5分であることを表わす(準備も同様)。

表3. 授業連絡に関する個人別データ

		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	合計	平均
報 告	①	11回	11回	7回	9回	8回	9回	55回	9回
	②	49分	217分	179分	256分	416分	657分	1774分	295.7分
	③	4.5分	19.7分	25.6分	28.4分	52.0分	73.0分		32.3分
準 備	④	10回	2回	6回	3回	5回	9回	35回	5.8回
	⑤	23分	125分	56分	26分	39分	130分	399分	66.5分
	⑥	2.3分	62.5分	9.3分	8.7分	7.8分	14.4分		17.5分

(①報告回数 ②総報告時間 ③平均報告時間 ④準備回数 ⑤総準備時間 ⑥平均準備時間)

「報告」「準備」回数ともに、かなり個人差は見られるが、平均報告時間ではBさん・Cさん・Dさんがほぼ近い値になり、平均準備時間では、Cさん・Dさん・Eさんが近い値となった。報告におけるAさん・Eさん・Fさん、準備におけるAさん・Bさんはかなり外れた値となった。外れ値となった原因は、ログからは探れないため、インタビューを行った結果、操作の際の行動が明らかになった。ほとんどのTAがMoodle上で入力・確認する方法をとっている中、Aさんはエディタを利用して報告を作成し、それをコピーし貼り付け、準備ではMoodle上でコピーしエディタに貼り付け、印刷して確認するという方法をとっており、短い時間での操作となったと思われる。報告の操作時間が長いEさん・Fさん、準備の操作時間が長いBさんは、メールを確認したり、ブラウザを使って他の頁を閲覧しながら報告・準備操作を行っていたため、全体の操作時間が長くなったと思われる。

5.3. 「時間」について

ここでは、観点の一つである「いつでも」アクセスできるかどうかの検証のため、ログの「時間」を分析することで、授業連絡の日時を検討する。

まず、授業報告（延べ55回）が行われた日は、やはり授業当日（木曜日）が18回（32.7%）で一番多かった。そして授業実施日から4日以内（日曜日）の授業報告は43回（78.2%）となった。授業報告は週末までに行うようにと指示をしたが、結果として8割弱の授業報告が週末までに実行されたことになる。

授業準備の日を詳しく見ると、授業の当日に報告を読む人が、14回40.0%で一番多く、次が、授業の前日が12回34.3%で多かった。このように、授業当日と前日に報告を読む人が7割を超えた。回数は少ないが、こちらの意図通り、授業準備は授業の前日か当日、目を通されていることがわかった。

一方、授業報告の時間帯は、夜9時から12時までと夜中1時から2時までが多く、授業準備の時間帯は、夜10時から夜中2時までと朝9時から10時までの間で行われることが多かった。授業連絡の時間帯はほとんど夜中になっているが、授業実施日に授業準備をする場合、前日の夜よりは授業当日の朝となっていることが分かった。これはノートなどで授業報告を管理している形態と同じであろう。

なお、授業報告の時間帯を表にしたものが表4と表5である（X座標は報告日を示す。授業日に出すと0、授業日の次の日は1で、7が次の授業日である。Y座標は、時間を示す。0時-1時に報告すると0、1時-2時に報告すると1である）。このように、授業報告の時間帯は、同じパターンはないものの、報告授業実施日から4日以内に報

告を書いている傾向があると考えられる。

表 4. 5月28日の授業報告

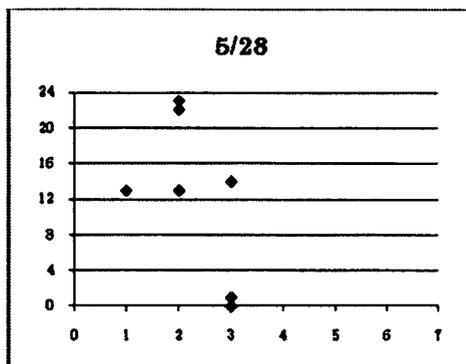
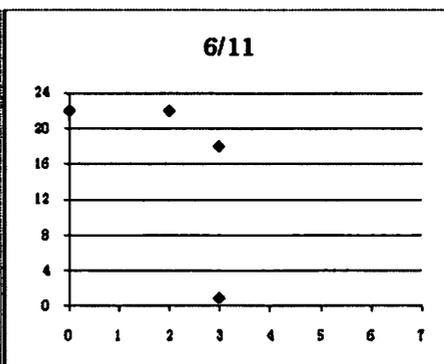


表 5. 6月11日の授業報告



5.4. 「IPアドレス」について

ここでは、「IPアドレス」から操作環境を検討し、「どこからでも」アクセスしているのか検証する。なお、不明な点については、インタビュー結果を用いた。

Dさん、Eさん、Fさんの授業連絡はすべて同じIPアドレスを使って行われている。AさんとCさんは3つのIPアドレスから授業連絡をしていた。Bさんの操作のみ、全て異なるIPアドレスから行われていた。Bさんにインタビューしたところ、自宅のPCからのみ操作しているようで、プロバイダにアクセスするごとに異なるIPアドレスが割り振られる仕様のようなのである。

結果として、4人はいつも同じ環境から授業連絡を行い、2人は3ヶ所から報告をしていることから、Moodleでの授業連絡は、ほぼ一定の場所（パソコン）で行っていることが分かった。

TAは全て大学に所属しているため、大学内では研究室や情報処理室など、さまざまな場所でインターネットが使用できる。そのため、さまざまな場所からアクセスすることが予想されたが、結果としては一定のIPアドレスから、しかもインタビューの結果モバイルPCなどは使用せず、自宅などの固定の場所から行っていることがわかった。これは、授業報告がある種「宿題」（2009年レポート）に近いものであり、ブラウジングのように、気楽にできるものではないという一面が伺える。

Moodleはサーバー上のアプリケーションであるため、インターネットに接続しているパソコンさえあれば授業連絡ができると考えられるが、IPの特徴とインタビューの結果から、使い慣れたパソコンでの授業連絡を行っていることがわかった。

5.5. 「操作」について

「3. 3. 授業報告に関する指示」で述べたように、Moodle の操作に関する説明は一切行わなかったが、実際に授業連絡者がどのような操作を行ったのかを「2009 年ログ」から確認する。

まず、「5. 1. 全体の傾向」で述べたように授業準備回数が報告に比べ少ないことがわかった。この原因を、ログの分析から探ったところ、授業準備単独では行わず、授業報告の際に確認しているのではないかと推測される。

授業報告を行うまでの操作のパターン（延べ 55 回）を調べてみると、他の操作を何もせず担当した学習者の項目に入って書き込みを行ったのが 28 回（50.9%）であったが、次に多かったのが他の学習者に関する書き込みを確認した後で、書き込みをするパターンで、これは 20 回（36.4%）ある。授業報告の段階で他の学習者の情報を読んでいたため、授業準備として授業前に読む必要性が生じなかったものと思われる。

次に、操作の中で注目すべきは、誤操作の少なさであろう。5 月 17 日に F さんは「ディスカッショントピックを追加する」という操作である「add post」を行っている。誤りに気付いたのか、F さんはその直後にトピックを削除する「delete post」を行っている。このように、誤操作を行っても自分で解決できる程、Moodle の操作は直感的であると考えられる。

表 6. 同時にアクセスした例

時間	IP アドレス	名称	操作	情報
2009/05/14 11:39	114.162.217.116	B	course view	日本語教育実践
2009/05/14 11:40	114.162.217.116	B	Forum view discussion	□□さんについて
2009/05/14 11:58	114.162.217.116	B	Forum add post	Re: □□さんについて
省略				
2009/05/14 12:05	115.125.80.179	C	course view	日本語教育実践
2009/05/14 12:05	115.125.80.179	C	Forum view discussion	▲▲さんについて
省略				
2009/05/14 12:11	114.162.217.116	B	Forum update post	Re: □□さんについて
2009/05/14 12:11	114.162.217.116	B	Forum view discussion	□□さんについて

また、操作を分析すると、二人の TA が同時にアクセスしていたことがわかった。表 6 では、B さんが□□さんについて報告を書いて追加し (add post) 確認している間に、

Cがログインし、▲▲さんなど数名の報告を読む(view)。その間に、Bさんは自分の追加した報告を修正し(update)、アップした(post)ことが伺われる。これは、ノートなどで授業記録を管理している場合、一人がノートを見、もう一人がノートに書いているという不可能な操作であり、この場合BさんやCさんにはわからないが、サーバー上でしか可能にならない操作といえる。

また、筆者たちが予想していなかったことだが、授業連絡とは直接関係のない参加者それぞれの情報を見る「user view」という操作を行っていたことがわかった。授業連絡者は各自の情報(プロフィール)を自由に編集でき、また他の人の情報も自由に見ることができるのであるが、他の授業連絡者の情報を見る操作が延べ8回行われていた。各自の情報を追加できることについては、全く知らせていなかったが、各自の意志で追加が行われ、また他の人がどのような情報を書いているのか見たものと思われる。個人情報の追加や、その閲覧などの操作も直感的に使用できるゆえに行えたものと思われる。

このように、授業報告に必要な操作が限定されているためか、いわゆる誤操作と考えられるものは1件のみで、それ以外の機能も必要に応じて使用することができたことが確認された。URLの入力、ID・仮パスワードの確認だけのデモンストレーションで、特に指導することなく、使用に問題が生じなかったのは、やはりMoodleの哲学にあるように「直感的」と考えられるゆえんであろう。

5.6. Moodleでの授業連絡について

TAには、日本語教育経験を持つものも多かったため、レポートにはそのときの経験と対照して、Moodleでの授業連絡について記述するように求めた。レポートから、Moodleで授業報告を行うメリットとデメリットとして挙げられたものを以下に示す(語句・表記の統一は筆者が行った)。まず、メリットとして以下のようなコメントが寄せられた。

- (1) 他の人の授業報告を気軽に見ることができる。 (同様意見、他3件)
- (2) 報告した内容が整理しやすく探したい情報がすぐ探し出せる。 (同様意見、他2件)
- (3) 内容をある程度まとめてから書くため、電話よりも時間が短く済む。
- (4) 学習者一人一人に対して、話の内容だけではなく、文法レベルや発音の特徴まで細かく報告できる。

このように、他の報告者のコメントが気楽に見られること(1)や、メールやファクシミリ等に比べ、学習者情報の管理のしやすさ(2)を挙げる TA が多かった。

これに対して、デメリットとして挙げられるものは、以下のようにまとめられる。

- (5) 文字だけの報告で終わってしまうため、TA の印象などを直接感じる事が難しい。
(同様意見、他 3 件)
- (6) 家へ帰ってから、または授業後しばらく時間をおいてから書き込むため、報告すべき細かい項目を忘れてしまう。
- (7) 時間・場所の制約がないため、報告を書くのが遅くなってしまう。
- (8) 他の TA が目を通していいのかどうか不安になる。
- (9) 情報漏れの可能性があるのではないか。

デメリットとして、授業を行ったそのままの印象が伝わらないのではないかという不安(5)が多く寄せられた。後述するが、2009 年にはこれに対処し、直接感じたことを共有するため授業後短いミーティングを持つようにした。また、(7)のようにいつでもどこでもアクセスできるから、逆にいつまでも書かなかったというコメントが挙げられた。ノートなどに書き込む場合は、ノートがある場所でしかも限られた時間内に記述しなければならない。Moodle で授業連絡を行う場合にはその制限がなくなるわけであるが、メリットの裏返しとしてのデメリットも指摘できる。

また、(8)のように他の人が読んでいないのではないか、という不安が挙げられた。これは紙ベースでも同じ問題が起こるのであるが、Moodle のログを解析する限り、結果的に授業報告は他の TA に読まれていることがわかった。「読んでいないかもしれないから、書かなくてもいい」という流れを作らないためにも、他の TA が読んだということを可視化して、TA の安心につなげる必要がある。

また、(9)のように情報漏れの危険性を挙げた TA がいた。ログを確認したところ、ユーザー管理者のミスか、全ての授業の閲覧権限を与えられた教師が、一度このコースにアクセスしていたことがわかったが、トップページだけの閲覧なので、情報漏れはない。コース作成時にアクセスできる人を制限したため、ファクシミリやメモなどのように、学習者の情報が外部に漏れる心配もないのだが、Web を使うということでこのような心配が生じたのだろう。このことを事前に連絡しておく必要がある。

5.7. インタビュー結果について

「2009年インタビュー」より、レポートには記載されていなかったことや、Moodleに入る前の操作や、入っているときの操作など、ログには残らない部分について、明らかになった点を述べる。

まず、Moodleに入る前までの操作として、自宅のパソコンの「お気に入り」に登録して、そこからしかアクセスしていない状況が明らかになった。いくらインターネットにつながっているパソコンがあっても、URLがわからなければ、アクセスできない。URLとID、パスワードが記載された配布物を使い、いろいろな場所でアクセスする利用形態も想定されたが、実際には、お気に入りに登録し、そのパソコンからしかアクセスしないという操作の固定が明らかになった。IPアドレスの分析の際に、決まった場所からの操作の実態が見られたが、このような問題が原因と考えられる。

さらに、レポートでは「他の人が書いた授業報告を気軽に見ることができる」というメリットを挙げるものが多かったが、それを反映してか、「他の人が読みやすいように」工夫して書くように心がけたという人がいた。そのため、改行などに気を配り、出来上がったものがあまり見やすすくない場合は、修正を施すなどしたようである。

これに関連して、報告を書き込んで確認した後すぐ変更できることがメリットとして挙げられていた。授業連絡者は、他の受講者の報告を読んだり、担当した学習者の過去の報告を読んだりして、書き忘れた内容を書き加えたりできたと述べている。メールでの報告ではこの点が難しいが、修正のしやすさも特徴の一つと挙げられるだろう。実際にログを分析している際に、更新操作が多かったのにはこのような理由も考えられるだろう。

また、他のTAの書き込んだ授業報告を読むことで、学習者の注意点や教え方などが分かり、日本語教育の経験の少ない身としては、良い勉強になったという感想も見られた。授業報告では、前掲の図2にあるように、各人が学習者の状況に応じて、文型の導入を行ったり、談話の形式を指導していたことが報告されているが、このような授業報告を読むことにより、TAとして会話のクラスで行うべき対応を学んだものと思われる。日本語教育実践の場で何をどう教えればいいのか、何を報告すればいいのかを学んだといえ、Moodle上で授業連絡を行うことは、教育的観点から望ましいものではないかと考えられる。

前述の更新操作に関連し、どんな変更を行ったか尋ねたところ、文言の修正という答えが多かった。特に2009年度のTAは5名中留学生4名と多かったこともあり、自分の入力した文の正しさには敏感に、より神経質になったのであろう。匿名でもない

ため、限られた人数ではあるが、自分の文章が他の人に読まれるということに対して、抵抗がないわけではないようだ。他のTAが行う報告が簡単に読めるというメリットは、逆にデメリットにもなりうると言えよう。

また、授業報告をMoodle上で書いているとき、改行すると改行幅が広がって困ったという感想が多く寄せられた。これはブラウザの問題と思われ、Microsoft Internet Explorerでは確認されたが、Mozilla FirefoxやGoogle Chromeでは確認されない現象である。問題なく使用するための推奨環境などを知らせておくことも今後は必要となってくるであろう。

なお、Moodle自体の操作は、非常に簡単で深刻な問題も発生しなかったが、本研究で使用したMoodleのコースサイトが「クラス試験運用」内に入っており、「クラス試験運用」という名前がわかりにくかったようで、授業のコースに入るまでに迷うことがあったようだ。今後コースサイトの名前に工夫も必要だろう。

このようにログには残らない部分ではいくつか問題点があったことがインタビューの結果から伺えた。

6. 考察

本調査の結果、Moodleを使って、かなり限定された場所から、あまり時間に制限なく授業報告を書き、実際の授業のある前日または当日授業準備を行い、それらの操作にはあまり困難は伴わなかったことがわかった。

前述のように、メリットとして挙げられているものについては、別段対処の必要はないが、デメリットとして挙げられるものについては、その対応が必要となる。

「2008年レポート」でも指摘されていたことであるが、授業をしたときの「新鮮な」印象が共有できないという問題があった。そのため2009年度は、4回目の授業よりTAからの提案もあり、授業終了後にミーティングを行い、学習者に関する簡単な報告を行ってもらった。ミーティングを始めて2・3回は10分近くかかったが、その後は5・6分で終わった。ミーティングでは、初めて対応する学習者に対して自分の対処・対応でよかったのかという質問が何度か寄せられた。Moodle上での授業報告では、単に対応した日本語学習者についての報告をするだけで、自分の対応でよかったのかという疑問が解消されなかったのであろう。ミーティングについての感想はレポートに現れず、インタビューでも確認できなかったのであるが、TAの疑問を直接確認したいという希望には応える必要があるだろう。

このように、Moodleだけでは、TA参加型会話クラスにおける授業連絡は充分とはいええず、TAの不安が残る形となってしまいます。そこで、理想としては、対面による授業連絡と、Moodleによる授業連絡の併用が望ましいのではないかと考え、これを本稿での運用法に関する提案としたい。

なお、今回 Moodle 上で授業連絡が行えたのは、TA が大学院生で「日本語教育学実践」という授業の受講者である面も無視できないだろう。授業報告はTAにとって多少「宿題」（2009年インタビューより）と捉えられ、義務をして行っていたようである。会話クラスにおいて、日本人学生や近隣に在住の方に、ボランティアとして参加していただく場合（数年前までは実際に大学周辺に住む留学生に日本語を教えるボランティアグループからの参加者があった）も想定される。今後このような場合、ある程度の心理的負担を伴う Moodle 上での報告を行うよう依頼できるのか、負担量を減らす試みとも合わせ、考える必要があろう。

7. 問題点と今後の課題

本稿では、紙幅の都合上、授業報告の内容自体には触れられなかった。これについては稿を改めて報告したい。授業報告は、教師や他のTAの報告を見て作成・修正していることが、ログやインタビューから明らかになったが、実際にはどのような影響が見られるのか、報告の文言をつぶさに観察する必要があるだろう。

また、今回の調査では日本語学習者に対して授業の感想を求めなかった。Moodleで授業連絡が行われていることは、学習者には直接関係のないことではあるが、授業の感想から、メリット・デメリットについて考察することも今後の課題といえる。

Moodleを使って授業報告をするという形態には、同じ授業に参加している人しか報告が読まれないという安心感がある。教師の報告や、他のTAの報告などを参考にしながら、自分の知り得た情報をどのように伝えるか考えて授業報告を書くという作業は、日本語教師の養成を目指した日本語教育実践という場には適しているのではないかと考えられる。

今後は、さらに有効となるMoodleの日本語教育での活用方法について、模索していきたい。

謝辞

本研究のために、データの使用を許諾してくれた2008年度・2009年度、首都大学東京日本語教育学教室開講の「日本語教育学実践」の受講者に感謝いたします。

参考文献

井上博樹・奥村晴彦・中田平(2006)『Moodle入門』海文堂

熊井信弘・境一三・西納春雄・安浪誠祐(2006)「Moodle を活用した外国語学習支援」、
第 46 回 LET 全国研究大会発表論文集 (CD-ROM)、外国語教育メディア学会、
pp. 551-562

脇田里子・越智洋司(2006)「授業報告としての Moodle の活用」『日本語教育方法研究会誌』、Vol. 13 No. 1、pp. 12-13

(ちょうにょん・首都大学東京大学院生)

(はせがわもりひさ・首都大学東京准教授)